

(そのとき、)復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに尋ねた。「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、子がなのまま死にました。次男、三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を残さないで死にました。最後にその女も死にました。すると復活の時、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」ルカ20章

生きるとは

旧約時代、人は死ねば黄泉に向かい、魂が永遠の命を得て復活するとう考えはまだ、はっきりとは示されていませんでした。従って、あの世に希望を託してこの世を生きたる生き方はあり得ませんでした。

しかし、旧約時代も終盤になったBC.2世紀頃「マカバイ記」には、復活に希望を託して死をも厭わない信仰の親子が見られ、「知恵の書」においては、神を信じない者の人生観と、神に従う人の受ける報いが語られて「永遠の命」および「復活思想」が登場するのであります。しかし、宗教の指導者である司祭集団のサドカイ派はこれを否定していました。イエスはこの集団と論争になります。サドカイ派は、モーセの書を論拠に復活を否定し、イエスはそのモーセの書を用いて次のように

逆に解き明かします。

「モーセも『柴』の箇所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んでそのことを示している。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ」と。

つまり、イエスは、アブラハムも、イサクもヤコブも、「死んだ者ではなく生きて復活に預かる者となっている」と言っておられるのです

神、イエスにとって、「生きる」とは、魂が神と共にいることであり、「死ぬ」とは、魂が神から離れて滅ぶことなのです。

アブラハム、イサク、ヤコブは今や死ぬことがない天使に等しい者であり、復活に預かる者として魂が生きている者なのです。

此の世で、生きていると思っている私たちですが、果たして「神と共にいる」生き方を目指して

いるのでしょうか？

神は人間をこの世に創造する時、見える体と、心は、見えない神に通じるように、見えないように造りました。

それゆえ、体は、植物が成長し、花を咲かせ、実を結ばせて努めを終えて枯れていくように、心を育て、花を咲かせ、実を結ばせたら、心を神に託し、使命を果たして土に帰り、復活を待つのです。

ですから、此の世で「心」を死なせてはならないのです。心を生かし、生きて心が神のもとに行けるように。

2022年11月6日
主任司祭 昌川信雄

